


今 月 の 一 冊

元木更津市教育委員会教育長 西村 堯 選

聞き書 緒方貞子回顧録

野林 健・納家 政嗣 著 ・ 岩波現代文庫

ISBN978-4-00-603319-4

1,540 円 + 税

国連難民高等弁務官などをつとめた緒方貞子氏が亡くなったのは、2019 年 10 月 22 日である。92 歳であった。そこで、今月、10 月号の「今月の一冊」に本書を取り上げて、その偉大な業績をたどることとしたい。

「聞き書」とあるのは、二人の編者が、たくさんの質問を用意し、13 回に及ぶインタビューを行い、その記録に緒方氏が手を加えてまとめたものである（「はしがき」に 2015 年初夏とある）。語り口は柔らかでとりつき易いが、内容は分厚く、一言一言が、ズシリと重みがあり、緒方氏の骨太な人物像と複雑な国際社会のあり様に直面することになる。

この偉大な国際人の生涯を簡単にまとめることなど困難である。本書だけでも、文庫版 340 ページに余る大著であり、通読するのも、なかなか大変だ。したがって、まとめるというよりは、私が通読して、特に印象に残った事柄を述べることとしよう。

第一に、緒方氏の家庭環境のことである。祖父も父も外交官として活躍し、子どもの頃から米国や中国などで過ごし、政治や国際関係のことが話題になる環境に育った。語学はもとより、国際感覚は、子ども時代から培われてきたの

である。第1章「子どもの頃」、第2章「学生時代」に詳しい。

第二に、研究者としても優れた研究実績を残している。「満州事変と政策の形成経過」という論文が高く評価されている。第3章の中で、

日本はなぜあのような戦争へ突入していったのか。この問いは私の生い立ちにも関係していましたが、また当時の研究者であれば誰もが抱いたものだと思います。

と述べている。

第三には、「研究と実務の一体化」ということである。このことは、氏が随所で述べている。研究を実務に生かすということである。

第四には、徹底した現場主義ということである。第6章「国連難民高等弁務官として(上)」に、次のような言葉がある。

私たちが向き合っていたのは、人の生き死にの問題でした。難民を放っておけばそれだけ死者が増える。そういう緊迫感はみんな持っていました。大事なときは行動しないと行かないのです。

コソヴォ難民問題、第7章で述べられているルワンダ難民問題でも、氏は危険をおかして、現地に何度も足を運ぶ。読みながら、思わず手に汗がにじんでくる。現場主義の姿勢は、後に JICA の理事長に就任しても貫かれている。若い職員をどんどん現場に派遣して、勉強させている。

第五には、人道主義であるが、

柔軟だが徹底したリアリストでもある

(p.337 「編者あとがき」)

ということである。

人の生命を守ることが一番大事なことで、そのことに従来の仕組みやルールがそぐわないのならルールや仕組みを変えればよい、それが私の発想でした。

(p.232)

と述べている。

本書の巻末に中満 泉氏の「解説 緒方貞子さんの真骨頂」という文章があり、そこに「人道主義者とリアリスト、実務者と学者」とまとめられている。まさに至言である。

随所に、厳しい体験に根差した「緒方語録」があるが、ひとつだけ引用して結びとしよう。

いまは、政治家まで官僚化していますね。戦略的思考なんて考えたこともない、内向きの人ばかりになってしまったのではないですか。安定を壊さないように、なるべく現状維持に努める政治家か、そうでなければ、先のことをまったく考えずに発言して、安定を壊してしまう政治家がいるだけです。……

(p.88)

今の政治家の方々は、この言葉をどう受けとめるだろうか。

ところで、2019年12月4日には、アフガンで精力的に活動していた、医師 中村 哲氏が凶弾に倒れている。2019年に、国際的に誇るべき、二人の方が亡くなったことになる。誠に残念な年であった。

緒方氏の人物像に触れながら、ダイナミックな国際社会の動向や各国の数多くの優れた指導者群にも触れることができる。

圧巻の書である。

今月の一冊 (令和2年10月号 第160号)